

ノンフィクション・小説

いわ かわ たかし
岩 川 隆

岩国市・周南市・防府市
(1933～2001)



『九華会報』第27号（平成5年）より。
※『九華会報』は防府高校の同窓会誌。

【著作】

小説『海峡』（昭和57・文藝春秋）
評伝『どうしやうもない私―わが山頭火伝』（平成元・講談社）
ノンフィクション『孤島の土となると―BC級戦犯裁判』（平成7・講談社）ほか

作家岩川隆は、昭和八年（一九三三）一月二十五日山口県玖珂郡麻里布町（現・岩国市）に生まれた。戦時中母親の生家がある徳山市夜市（現・周南市夜市）に疎開し、戸田駅から旧制防府中学と新制防府高校へ六年間汽車通学、昭和二十六年（一九五二）三月に卒業している。

広島大学独文科を出た後上京、大学の先輩の梶山季之が率いるトップ屋集団「梶山師団」に所属して、ジャーナリストとしての基本を徹底的に学んだ。創刊直後の『週刊文春』で活躍。その後『週刊公論』『週刊女性』『平凡パンチ』などの記者を経て本格的に作家活動を開始する。

雑誌記者出身ということもあってルポルタージュを得意とし、政治・経済・社会物からスポーツ物まで、幅広い分野にわたる執筆活動を展開した。BC級戦犯裁判の問題にはとりわけ関心が深く、ライフワークとして取り組んだ。

『神を信ぜず―BC級戦犯の墓碑銘』『多くを語らず』『海峡』『決定的瞬間』『ぼくの元氣村探検』『ギミは長島を見たか』『日本の地下人脈』『競馬名人列伝』『どうしやうもない私―わが山頭火伝』ほか、数多くの小説・評伝・ノンフィクションなどを著している。歴史の行間に埋もれていく人々の真実を、旺盛な好奇心と徹底した取材で浮き上がらせる独特の手法が注目された個性派作家であった。「岩川の歩いたあとには草一本生えていない」と言われ、地を這うような精力的な取材をもとに執筆を続けた。

平成七年（一九九五）一月、『広く天下の優駿を求む』で第八回【平成六年度】馬事文化賞受賞。同年十月、『孤島の土となると―BC級戦犯裁判』で、第十七回講談社ノンフィクション賞を受賞した。平成十三年（二〇〇一）七月十五日、東京に没す。享年六十八歳。（文・森川信夫）



岩川隆が昭和20年4月から26年3月までの6年間、防府へ通うために乗降した戸田駅。



著書

岩川 隆 年譜

（提供・森川信夫）

昭和8（一九三三）年

1月25日、山口県玖珂郡麻里布町（現・岩国市）に生まれる。

昭和26（一九五二）年

戦争中母親の実家がある徳山市夜市（現・周南市夜市）に疎開、そこから旧制防府中学と新制防府高校へ6年間汽車通学。

昭和31（一九五六）年

3月、山口県立防府高校卒業。

昭和48（一九七三）年

3月、広島大学独文科卒業。

昭和50（一九七五）年

4月、『週刊文春』に小説「ドンブリリストの冒険」の連載を開始。10月に完結。（昭和49年5月文藝春秋刊。）

昭和51（一九七六）年

11月、評伝『巨魁―岸信介研究―』を刊行。

昭和52（一九七七）年

4月、スポーツドキュメント『長島茂雄―不思議な魅力とその実像―』を刊行。8月、小説集『多くを語らず』を刊行（「運」「夏断」「安来節」が直木賞候補作）。

昭和54（一九七九）年

4月、『文藝春秋』に評伝「佐藤栄作研究」連載を開始。（昭和55年9月完結。昭和59年2月徳間書店より刊行。）

昭和55（一九八〇）年

5月、スポーツドキュメント『〇割〇分〇厘ひとり旅』を刊行。

昭和57（一九八二）年

2月、ノンフィクション『我れ自爆す、天候晴れ』を刊行。2月、『中央公論』に小説「決定的瞬間」の連載を開始。（昭和58年12月完結。昭和59年3月中央公論社刊。）

昭和58（一九八三）年

5月、『下キュメント家庭崩壊』を刊行。9月、小説『海峡』を刊行（直木賞候補作）。

昭和59（一九八四）年

5月、ノンフィクション『人間の旗―甦った、血と涙の連隊旗』を刊行。11月、ノンフィクション『日本の地下人脈―政・財界を動かす「陰の力」』を刊行。

昭和60（一九八五）年

3月、小説『たらこ刑事』を刊行。12月、『野性時代』にノンフィクション「君は天皇を見たか」の連載を開始。（昭和60年3月完結。昭和61年8月、加筆訂正して『上着をぬいた天皇』と改題し刊行。）

昭和62（一九八七）年

12月、小説『天涯茫々』を刊行。

昭和63（一九八八）年

1月、評論『ノンフィクションの技術と思想』を刊行。

平成元（一九八九）年

12月、ノンフィクション『ぼくの元氣村探検』を刊行。

平成2（一九九〇）年

5月、評伝『どうしやうもない私―わが山頭火伝』を刊行。

平成6（一九九四）年

5月、『ロングショットをもう一丁―日本競馬名人列伝―』を刊行。

平成7（一九九五）年

9月、『広く天下の優駿を求む』を刊行。

昭和60（一九八五）年

1月、『広く天下の優駿を求む』で第8回【平成六年度】馬事文化賞受賞。6月、ノンフィクション『孤島の土となると―BC級戦犯裁判』を刊行。10月、『孤島の土となるとも―BC級戦犯裁判』で、第17回講談社ノンフィクション賞受賞。

昭和62（一九八七）年

7月15日、東京に没す。享年68歳。

昭和63（一九八八）年

平成元（一九八九）年

平成2（一九九〇）年

平成6（一九九四）年

平成7（一九九五）年

平成13（二〇〇二）年

私は長いあいだ、作者である種山頭火がなにもであるか、どのような素性の主であるのか、ほとんど知らなかった。知っていることといえば、かれが行乞―托鉢行脚の俳人であり、分け入つても分け入つても青い山雨ふるふるさとははだしであるくなどという句を残している、といったことくらいであった。

すこしおどろいたのは、この山頭火が山口県防府市の出身であることをだれかに教えられたときだ。私ごとで恐縮だが、防府（三田尻）は、いわば私のふるさどである。岩国生まれの私は、終戦の直前に徳山市の奥（夜市）にある母の生家に疎開し、そのまま終戦直後も汽車通学で六年間防府に通い、旧制防府中学Ⅱ防府高校を卒業した。

たいいていのことは記憶しているつもりだが、少なくともこの当時、私は山頭火の名を聞いたことがなかった。かれは、防府市内で生まれただけでなく、旧制防府中学の前身である周陽学舎に学んだという。そうなる中学校の大先輩でもあるわけだが、このことを私に教えてくれた者は一人もいなかった。

私がうかつであったのか、時代がそれどころではなかったのか。いや、やはりまだ、山頭火はふるさに迎えられていなかったとみたほうがいいだろう。

（岩川隆『どうしやうもない私―わが山頭火伝』より）

岩川 隆